



昭和51年1月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区第一丁目7-5  
 井上重兵衛方 電(321) 1480  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 日東印刷工業株式会社 電(481) 7445

狂言人語

あけましておめでとうございます。  
 昭和五十一年、永い昭和の歴史も半世紀を越え、いよいよまた新しい時代に踏み出しました。今年もよろしくお願ひ致します。

を舞台に見せてくれました。

本年も、野村又三郎師の令息信行君(四才)が五月三十日「やるまい会」で、靱猿の子猿で初舞台を踏む予定で、名門又三郎家の後継者として、いよいよ狂言師として出発するものです。俗に「猿に始つて狐に終る」と申します

謹賀新年

昭和五十一年元旦

新しい年の話題をいくつかひろってみます。

新春二月の末から十日間程、狂言の海外公演が予定されております。ロンドン、パリを予定地として野村万之丞万作。又三郎師等の一行です。演目は「靱猿」「棒縛」の二番、すっかり定例化したかの如き海外公演ですが、今回も盛會が予想されるものです。

扱、昨年も次代を担うべき子供達が大いに活躍しました。今枝郁雄、靖雄両兄弟の活躍、佐藤友彦長男、融の子猿での初舞台など、相次いで元気な姿

狂言共同社

名古屋和泉会

が、永い狂言師としての第一歩が始まるもので、大いにその舞台が期待されます。

扱、昨年末笛方藤田流後継者藤田昭彦君の結婚披露宴が喜びの内に盛大に行われ、藤田家の基盤もいよいよ堅固に、今後の同流の発展も期待されておりますが、本年四月には、流祖藤田清兵衛重政三百五十年。先代清兵衛重孝五十年追善能が盛大に開催される予定です。

当地狂言界も、後継者が続々と控えておりまさに新しい時代の替り目とも

思われる様相を呈しておりますが、長老佐藤卯三郎ますます元氣、河村丘造も健在、松次郎、礼之助、秀雄等も、いよいよ円熟した芸境に入りつつあります。祐一、友彦、弘之らも大いに活躍が期待され、後継の子供達も続々と舞台が予定されております。今年もどうかよろしくお願ひします。

本年の当地での狂言会の予定をお知らせします。(変更もあり)

- 三月二十九日(日) 大蔵流狂言会(無)
- 五月三十日(日) やるまい会(有)
- 七月十一日(日) 朝日狂言会(有)
- 八月二十九日(日) 和泉狂言会(無)
- 十月十六日(土) やるまい会(有)
- 十月二十一日(日) 和泉会(有)

一月の催能

- 一月七日 学生能  
 加茂 古橋 明子 高安 滋郎  
 松井 直子
- 一月十一日 新春能  
 橋弁慶 野々山正毅  
 葛城 村瀬 郁子 西村 欽也  
 弱法師 中山 喜作 高安 滋郎  
 佐藤卯三郎
- 一月十五日 清額会  
 羽衣 天野登茂子 高安 滋郎  
 今村 嘉男 高安 勝久

狂言解説

能 竹生島参 佐藤 秀雄 井上松次郎  
 一月十八日 邦謡会

口真似||さる所から見事な樽肴をもらった主人、一人で呑むのも本意でなく酒の相手を太郎冠者に捜して来る様云つきました。ところが太郎冠者が連れて来たのは近所でも評判の酒乱の男一計を案じた主人は、太郎冠者に自分の口真似をするよう云付けます……。

しびり||和泉の堺へ行って肴を求めて来る様云付けられた冠者、行きたくなさに、しびりがおこつて歩かれぬと座り込んでしまいます。仮病と見抜いた主人は一計を案じ……。

昆布売||自分で太刀を持って出かけた大名、丁度通り合せた若狭の小浜の昂布売りを、無理矢理感して太刀持ちに仕立てました。おさまらない昆布売りは持たされた太刀で大名を威し、逆に大名は小刀迄取り上げられ、昆布を売らされる破目となります……。

竹生嶋参||主に無断で竹生嶋へ詣った太郎冠者。立腹した主人の機嫌をおそろと、他人から聞いた話をおもしろおかしくするのですが、くちなわ(へび)の秀句にハタとつまつてしまいます……。

能楽協会名古屋支部よりおしらせ  
 旧十二月七日に催しました歳末助け合い義捐能は左記の通り義捐金をそれぞれ県、市へ寄託致しました。各位の御協力を感謝致します。  
 愛知県 拾五萬貳千參百円  
 名古屋市 拾五萬貳千參百円

狂言 団子

野村 広二

昭和五十年の一年もなかなか多彩、広狭の固定と流動を続けた年でありました。老女物、祝賀・追善、記念能と狂言会、芸術院新会員、叙勲・受賞、書籍の刊行、幅広い啓蒙運動、海外能など、話題は盡きません。とりわけ老女物は梅若六郎氏が「関寺小町」を舞われ、東の十四世大藏弥右エ門榮虎三百回忌追善会、西の茂山千作翁傘の祝の狂言会、それに名古屋の野村又三郎舞台五十年記念狂言会（花子又三郎千作・万蔵・藤九郎の三長老出演）がおこなわれたことは広く耳目を集めたこのほか演能の明るい話題は多いが、大藏流の三青年（基嗣・長徳・あきら）が釣狐を演じたことは正義氏の花子とともに語り草となる。喜多実氏の芸術院新会員はめでたい。同時に、わが恩師谷川徹三先生もなられた。先生は能に深い理解を示され、その高い芸術精神を賛美される。昨年末の二著のうち「能の美しさ」が「心と形」（岩波書店、四〇・十一）に載る。戦前の能楽全書（第一巻、創元社、昭十八）に「花伝書」の長篇を寄せられたが、深い洞察と広い展望のある文章をくりかえし読ませていただく。宝生新氏のお好きな先生を水道橋でおみかけした前後である。昔なつかしくまためでたい、狂言では三長老とも元氣。中堅と青年の充実を支えられて今年もよき舞台をみせていただきたい。放送は能十番前後狂言五番ほど（NHK）みる。本は道・中世の理念（小西甚一、講談社）

井上菊次郎のこと（小林實、五回、能楽タイムズ）トロイアの女（谷川徹三朝日・日記から、一月）ほか展望の厚い出版傾向。なかに「謡曲の詩と西洋の詩」（平川祐弘、朝日新聞社）はベスト5に挙げられた（江藤淳、朝日、一九七五回顧・文学部門、十二・十二）古書の複製も目ざましい。昨年からの春にかけて、狂言六義（上・下）抜書、天理図書館善本叢和書之部、解題北川忠彦、八木書店）古本能狂言（大藏家伝之書、大藏弥太郎編、六冊、限定三〇〇部、臨川書店）が刊行される由。ここで昨年物故された江島伊兵エ氏ほか能界の方々のご冥福をお祈りします。

さて、昨年の名古屋は、熱田能楽殿創立二十周年記念能がおこなわれたことを挙げねばなるまい。そしてゆっくりとした前進と変貌のなかに大小の新しい躍動が数々みられて楽しかった。例年の諸行事も滞りなく催される。シテ方各流は、元正・六郎・喜之三氏の往来が英雄氏の来名とともに観宝二流の充実沈潜を目指す。金春流は十回にも及ぼうとする高校生鑑賞能（主催名古屋学生能学連盟）を連演。中部金剛会は新陣容を張る。喜多流は三人の会に氣を吐く。中日五流能は二十回目を迎え、名古屋和泉会が第十五回を意義深く催す。この和泉会は狂言共同社が平常狂言に打ち込む姿をみせる大切な舞台。無事その役目を果して来たことを喜びたい。能も狂言も、来名・地元一調娘捨（鬼頭八郎・宝生英雄）ほか佳作が多い。

昨年来の放送NHKは朗読・申楽談義（竹内三郎アナ、六回、FM）をきき、伊勢物語（講師森野宗明、テキストに「中将の面」の話へ喜多実Vのる三月まで）をみる。新年には揺ぎない底辺の強さと美しい花が見事に開くことを望みたい。

二月の予告

- 二月一日 宝生会
- 能竹生 嶋 衣斐 正宜
- 能桜 川 辰見 孝 佐藤 友彦
- 能鉢 木 井上礼之助 大野 弘之
- 能重 喜 佐藤 融 井上松次郎
- 二月八日 観世会
- 能屋 島 上田 昭也 高安 滋郎
- 能胡 蝶 観世 元正 西村 欽也
- 能素袍 落 井上松次郎 井上礼之助
- 二月十五日 梅猶会
- 能弱法師 梅若 盛義 佐藤卯三郎
- 能二人 静 梅若 修一 梅若 吉高
- 能海 士 熊沢惠美子 佐藤 秀雄
- 能粟田口 井上松次郎 佐藤 友彦
- 二月廿二日 青陽会
- 能経 正 橋岡 久共 高安 滋郎
- 能巻 絹 前野 郁子 高安 勝久
- 能熊 坂 久田 徹二 西村 欽也
- 能大野 弘之
- 能宝の笠 佐藤 秀雄 井上松次郎
- 二月廿九日 梅若会
- 能羽衣 井上松次郎 佐藤 友彦
- 能柏崎 井上松次郎 佐藤 友彦
- 能因幡堂 井上松次郎 佐藤 友彦

賀正

おごや

河文

電話代表四一三八一

トヨダビル店

地下一階店

二階店

大名古屋ビル店

栄スカイル店

長者町店

船津屋

電話〇五九四〇二一八八〇番

# 狂言

## 狂言人語

此度狂言共同社同人、佐藤卯三郎は、脳内出血により、昭和五十一年一月十九日、永眠致しました。謹んで御報告申し上げますとともに、皆様からの生前の暖かい御厚情を心から感謝申し上げます。

昭和五十一年二月一日  
狂言共同社

佐藤卯三郎師は、去る一月八日、師が狂言を指導する「玉石会」に、本年初の稽古に出かけられ、稽古の指導中に倒れられたものである。すぐさま国立名古屋病院に入院され、手当を受けながら、十日余りの昏睡状態の後、一月十九日正午過ぎ、終に意識を回復されることのないまま、不憫の人となった。八十四才。生前の師の元氣な姿を知る者には、余りにも突然の出来事であった。

師は明治二十四年十一月生れ、この年の六月には、奇しくも狂言共同社が先人達によって設立された年に当っており、師の一生は、文字通り狂言共同社と共に生れ、歩んだ道であった。

明治三十年、九世野村又三郎に入門

昭和五十一年二月一日発行  
発行所  
名古屋市中区橋一丁目7-5  
井上重兵衛方 電(321)1480  
名古屋狂言共同社  
印刷所  
日東印刷工業株式会社 電(481)7445

以後十世又三郎、及び先代河村健三郎に師事する。

明治二十二年、「口真似」初舞台

昭和三年 「三番叟」披露

三十年 「釣狐」

四十八年 「花子」

五十年 重要無形文化財総合保持者に指定、日本能楽会会員。

ともかく元氣な師であった。八十才を超えた晩年も、しゃれたスポーツンヤツに、愛用の帽子、サングラスといった出立で、能楽堂に通われ、元氣な舞台姿はともその年には見えなかつたであろう。

こうした師の元氣さが、昭和四十六年十月、「共同社創立八十周年記念狂言会」における「釣狐」を苦もなく演じて見せたものである。狂言の中でも最も重い習い物であり、体力気力とも最も充実している若い頃に演じてさえ困難な大曲を、八十才という高令で演じたのは、おそらく師が初めての記録ではなからうか。その後昭和三十八年「花子」、四十九年「木六駄」と大曲を演じ、いよいよその元氣な姿を見せてくれたものだった。

最後の舞台となったのは、昨年末十二月二十一日、能楽殿で名古屋市教育委員会青少年芸術劇場における「昆布

売」、及び同日夕刻よりCBCホールでの「蝸牛」に野村又三郎師の相手役として主を勤めたのが最後となった。謹んで師の冥福を祈るものである。

狂言共同社同人

## 二月の催能

二月一日	宝生会	能竹生嶋 衣斐 正宜 高安 勝久
		能桜川 辰巳 孝 西村 欽也
		能鉢木 内藤 泰二 高安 滋郎
		能重喜 佐藤 融 佐藤 友彦
二月八日	観世会	能屋島 上田 昭也 高安 滋郎
		能胡蝶 観世 元正 西村 欽也
二月十五日	梅猶会	能素袍 落 井上礼之助 佐藤 友彦
		能弱法師 梅若 盛義 高安 滋郎
		能二人 静 梅若 修一 西村 欽也
		能海士 熊沢惠美子 高安 勝久
		能栗田 口 井上松次郎 佐藤 友彦
二月廿二日	青陽会	能経正 橋岡 久共 高安 滋郎
		能巻網 前野 郁子 高安 勝久
		能熊坂 久田 徹二 西村 欽也
		能宝の笠 佐藤 秀雄 井上松次郎
二月廿九日	梅若会	能羽衣 豊田 寿子 西村 欽也
		能因幡 堂 井上松次郎 佐藤 友彦

## 狂言解説

重喜 法事に招かれた坊主、弟子の重喜に頭を剃らせようとしませんが、そのものの重喜はかみそりをもって師匠にけつまずく有様。そこで師匠は「弟子七尺を退って師の影を踏まず」の教えを聴かせました……。

素襖落 俄に伊勢参宮を思い立った主が、太郎冠者を伯父の許へ誘いの使いにやります。伯父は急なこととて行けぬと断りますが、供をすると云う太郎冠者の門出を祝って酒を吞ませたうえ素襖を与えて自分の代参を頼みます。ほろ酔い加減の太郎冠者は迎えに来た主人とぶつかり、あわてて素襖をかいたのですが……。

墨 塗 訴訟に勝って晴れて本国へ下ることになった大名。在京中馴染みとなった女の許へ、別れを告げに出かけます。これを聞いた女は泣きながら大名に恨み事を述べ、大名もつりこまれて泣き出す始末。太郎冠者が見ると、女はびん水入の水を目に塗っての泣き真似です。太郎は知らぬふりして水と墨とを取り替えておきました……。

栗田口 栗田口とは刀のことですが、これを知らぬ大名は、栗田口較べに出品しようとして太郎冠者を都へ買いにやります。例の如く大声で呼ばれる太郎冠者に、すっぱが声をかけ、面白おかしくこじつけて、自分が栗田口だと称して大名の許へ同道します……。

宝の笠 宝較べに出品するため、宝を求めて都へ上った太郎冠者、いつもの如くすっぱにだまされ、蓬来の島の鬼

の持っていた隠れ笠だと称して古笠を売りつけられてしまいます……。

### 狂言紅白

野村 広二

二月八日、観世会初会、盛会。まず元昭氏が舞囃子・難波を舞う。さわやかに畳感をもって今年の幕があく。元正氏は胡蝶。前は御簾(みす)に葉玉(くすだま)模様の唐織、後の扮装には梅と源氏香の図柄が目にあざやか。

光源氏・舞樂胡蝶・前の唐織・後の源氏香と梅・シテ胡蝶のつながりが美しい幻想をかき立てる。清純さあふれ、これに胡蝶の執心がかすかな陰を宿して、情趣豊かな詩一篇を作り上げていた。正月はいつものように三か日テレビとラジオの邦楽放送に明けくれた。今年の五流謡曲の「翁」は金剛流。テレビは能・国栖(喜多実)と狂言・宝の槌(万蔵)・蝸牛(千作)に天鼓(六郎)。二日はこれも例によって三・四の本を開く。M教授の「もぎいく」から「春來たる」ではじまる「夕やけ雲」に「エッセイ」(「米英文学と日本文学」から、英文学者故富田彬氏・恩師)それから谷川徹三先生や世阿弥のことばにうつる。その後閑居の私も下旬三十一日二月一日の二日間招かれて

国家指定芸能特別鑑賞会(御園座)へ行くときは、心楽しく足も勇んだ。この人間国宝の会は今年十回目を迎えてようやく名古屋でも開かれた。能・狂言は、舞囃子・葛城・大和舞(桜間道雄)忠度(後藤得三)、囃子方は藤田

大五郎・幸宣佳・安福春雄・柿本豊次氏、狂言は船渡聲・名取川(万蔵)二番、この四番が二日間の四回に一番づつおこなわれた。伝統芸能の風格ある諸芸にたんのうする。因みに御園座では戦後数回の演能(復興能・金剛流の道成寺・左近追善能・五流能)にN纏やフランスのクラシック・バレエも催された文化の推進に大役を果している。

さて、悲事の一つ。わが狂言共同社の長老佐藤卯三郎氏が一月十九日八十四才で永眠された。同氏は明治大正昭和の三代を狂言に生き、近年はいま病氣養生中の河村丘造氏と共によき長老として、昨年末まで元気に舞台で活躍された。三番叟は披かれたのは随分と前の話。調子の高い芸で、腰折の祖父(おおじ)の役はまさに適役。晩年花子・木六駄を演じてその長い狂言歴を見事に飾られたのも大きな話題。諸趣味に深く、一種雅趣のある舞台はいつまでも思い出に生きよう。

放送は海人(道雄、NHK、以下おなじ)高校講座・古典一乙・隅田川(菅野一雄・中村保雄、能について、参考西本願寺北舞台能と同寺座敷能ほか)市民大学講座・伊勢物語(第四回・井筒、天福本二三段、森野宗明・喜多実、能井筒鑑賞(喜多流)文化展望・古代楽器復元(箏・篳篥・簫ほか、小泉文夫)をみ、能を探る・道成寺(能楽堂の音響効果、司会福田修、FM愛知)をきく。本は「能をたのしむ」(増田正造・戸井田道三、平凡社カラー新書)狂言をたのしむ(小林實、同寄贈

(日本の喜劇(喜劇(笑い)と徳川家康、飯沢匡、朝日一・十三)短歌と花鳥(能楽の美と花、久松潜一、朝日短歌俳句欄、一・十三)神楽面(本田安次ほか、淡交社、未見)など。付記。一月号で大蔵流の三青年(基義・云々)が基嗣氏、「心と形」(谷川徹三、岩波、五〇・十一)が四〇・十一になっておりました。お詫びして訂正します。

### 三月の予告

三月 七日	九阜会	野垣 慶子	高安 滋郎
能 巴		佐藤 友彦	
半能融		観世 武雄	西村 欽也
狂 舟ふな		井上松次郎	井上礼之助
三月 十四日	観 昭会		
能 弱法師		森 幸子	高安 滋郎
能 熊 野		竹下 稻子	西村 欽也
狂 謀生ケ種		野村又三郎	井上礼之助
三月 廿日	邦 謡 会		
能 巴		今沢 美和	西村 欽也
能 蟬 丸		須部 一政	高安 滋郎
能 天 鼓		梅田 邦久	高安 勝久
狂 仏 師		佐藤 友彦	佐藤 秀雄
三月 廿八日	中日五流能		

酒 味 噌 商  
た ま り 食 料 品  
む と う 食 品 店

名古屋市昭和区川名本町1の10  
電話 62 2 1 6 6 番

# 狂

# 言

昭和51年3月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区橋下町7-5  
 井上重兵衛方 電(321)1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 日東印刷工業株式会社 電(481)7445

## 狂言人語

めつきり春らしくなりました。一雨ごとに暖かくなり、冷たい強風も春一番、春を生み出す胎動と思えば少しも苦になりません。春の催能もいよ／＼これからが盛んです。

ロッキード事件で、このところ政財界は大騒ぎ、証人喚問での「知らぬ」「存ぜぬ」は全く見事なものでした。「佐渡狐」の昔からお役人にワイロはつきものかもしれませんが、ふつきりとした尾っぽはなか／＼出さないようです。喚問に応じられない病人は、多分ピーナツの食べ過ぎではないでしょうか。

## 三月の催能

- |            |             |
|------------|-------------|
| 三月 七日      | 九阜会         |
| 龍巴         | 野垣 慶子 高安 滋郎 |
| 半能融        | 佐藤 友彦       |
| 狂舟ふな       | 鶴世 武雄 西村 欽也 |
| 三月十四日      | 井上松次郎 井上礼之助 |
| 弱法師        | 観 昭 会       |
| 森 幸子 高安 滋郎 | 野村又三郎       |
| 熊 野        | 竹下 稻子 西村 欽也 |
| 狂謀生ケ種      | 野村又三郎 井上礼之助 |

## 三月 廿日 邦謡会

- |       |             |
|-------|-------------|
| 龍巴    | 今沢 美和 西村 欽也 |
| 龍 蟬   | 井上礼之助       |
| 丸     | 須部 一政 高安 滋郎 |
| 天 鼓   | 清沢 井上松次郎    |
| 龍 天   | 梅田 邦久 高安 勝久 |
| 狂 仏 師 | 野村又三郎       |
| 三月廿一日 | 佐藤 友彦 佐藤 秀雄 |
| 三月廿八日 | 武田徹楽会 中日五流能 |

## 狂言解説

舟ふな 西の宮へ遊山に出た主従。途中の神崎の渡し場で船を呼ぼうと太郎冠者は「ふなヤイ」と叫びます。主人があれは「ふね」だと云っても太郎冠者は聞き入れません。またもや主従の間に古歌や謡を引用しての「ふねふな」論争が始まります……。

謀生ケ種 いつもの名人を伯父に持った男、いつもだまされるため、今日こそはと頭をしばって作り咄をしに行きますが、またもや逆にやりこめられてしまいます。伯父にうその上手のいわれを問うと、「謀生ケ種」とうその種がある、これを一つやろうと云い出します……。

仏師 御堂に納める仏を求めに都へ上った田舎者、例によって大声で呼び歩く所へスッパが声をかけます。おもしろおかしく話をつけたスッパは、自分が仏になりまして、約束の場所へ出かけ、田舎者を待ちうけます……。

## 人買い舟は沖をこぐ……

金で他人の恨を晴らす必殺仕業人現在テレビで放映中の藤田まことが主演するいわゆる必殺シリーズであるが、この仕業人の仲間の中村敦夫、中尾みえの紛する男女の大道芸人が登場する。武士崩れの男は、どうらんで顔を真白に塗りつぶし、女のひく三味線と歌謡に合せ、ぎくしゃくと身体を動かし、最後に気合もろとも意合抜きを見せるが、実はこれが竹光でわずかの見物も、いつもしらけて散ってしまふ。この女が三味線をひきながら歌うのが次の一節である。

人買い舟は沖をこぐ、  
 とても売らるゝ身を、  
 ただ静かにこげよ、  
 船頭殿。

売られて行く女の嘆きであろうか。あきらめにも似た嘆息か。一体どこの沖を舟は走っているのか。琵琶湖だろうか。とすれば都から買われたのか。おそらくは大津松本辺りから舟に乗せられたのであろう。人買い舟は真直ぐ湖を北上し、売られて行く先は越後か、奥州か……。売らるゝこの身ともはやあきらめているはずなのに、湖面に起

るさど波の様に、不安が入り乱れる。せめて静かに漕いでおくれ、船頭殿。悲しい歌である。女芸人は眉一つ動かさず、遠くを見つる様に歌う。まるで我身の境遇を想い起しているかの様だ。

この歌謡は実は中世の歌謡集「閑吟集」所集の歌である。中世は人買いが横行した時代であった。子供の頃に行方しれずになった、などというのは多く人買いの仕業であったのだろう。安寿姫と厨子丸の悲劇はあまりにも有名なが、謡曲の中にも人買いにまつわる話は数多い。この歌謡からまっさきに思い浮ぶのは「自然居士」であろう。都東山からワキの紛する人買いに引きたてられて、子方の童女は今まさに大津松本の港から人買い舟に連れ去られんとする。都から追いかけて来た自然居士と人買いとの間に緊迫した空気がみなぎる……。その他、人買いに売られた我子をたずねるものに「隅田川」「三井寺」「桜川」などがある。

狂言にも人買いが登場する。遠江の国から都へ上る途中の若者が、人買いにだまされて売りとばされそうになるのが、やはり大津松本の市である(磁石)もつともこゝではだまされるのが結局は人買いであって、売られた男が逆に代金をまき上げたり、磁石の精と偽って太刀を取り上げ、人買いを手玉にたつて追い込む結果となる。ついでながらこの若者を人買いが売りとばそうとする値が鳥目二百疋、末広がり一本が五百疋というに比べてあまりに安い人間の値である。

(鈍太郎)

狂言紅白

野村 広二

二月末から毎日のように鶯が白い椿にやってくる。菜の花は黄ばみ、沈丁花が匂い、白い桃がほころびはじめこの頃。二月二十一日(土)「山姥」(桜間道雄、NHK、以下おなじ)をきき、翌二十二日(日)金剛会(京都)で「熊野」(巖)をみ、夜はテレビで「弱法師」(高橋進)と「因幡堂」(山本東次郎)と仕舞・清経(英雄、観世能楽堂をみようと胸ふくらませたが、あいくの歯痛で、浅春の京都行は果せず、前後の放送だけ楽しむ、みたいと思っでも残らないときは、悔いがいつまでも残る。また放送に仕舞の登場をみたが、なかなかよい。これからも仕舞や小舞の上演が望ましい。近頃もよくテレビをみるが、三月になって七日、フランス映画「悪魔のようなあなた」(名古屋テレビ)をみた。自然(風景描写)が美しい。これには主演するアラソン・ドロンの和服姿のシーンが五回ほどでる。それは紋服で、紋は丸に洲浜この紋は大鼓の安福(春雄)家だけの紋の由。実は二十三年前に紋服(と秘蔵の大鼓)を失くされた。その紋服らしいのがでた不思議な映画であった(東京新聞二・十七)。安福さんならずとも大層残念なことである。さて三宅藤九郎氏宅が焼失と承る。二月二十九日のこと。お身体に別条なかったのと貴重な資料「六義」ほか少々火難を免れたことは不幸中の幸い。数々の伝承・愛蔵・必需の品をなくされたのではな

いかと案ずる。暖かくなってお目の治療をうけられるご予定、また今年には自作新狂言を和泉会(三回)に上演されようと新企画、一回目が好評であったのでどうか意気阻喪のないようお見舞を述べたい。

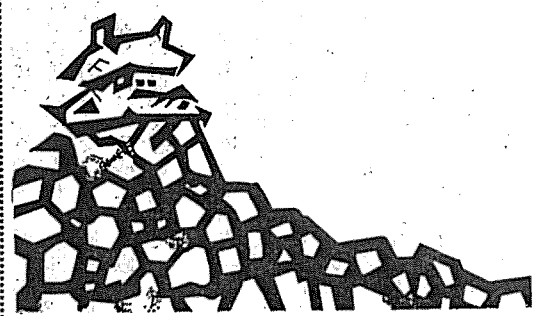
国文学者久松潜一博士がなくなられた。三月二日宵節句の日、八十一才。博士は愛知県知多半島の旧家(代々庄家)のご出身。お世話になる「日本文学評論史」のことは別記したいが、朝日新聞によれば同紙「短歌と花鳥」(四回、五一・一月、前号紹介)が絶筆のこと。十年以上も前の名古屋の万葉学会(愛文講堂)でM教授と談話をかわされていたおだやかなお顔はいまでも忘れられない。M教授から「いつでも生きていただき度い先生でございます」とのおたよりをいただく。父親(私)の記「母を思いて」(年々去来)をあらためて読み返す。

放送は空腕(大蔵弥太郎) 靱猿(藤九郎) 教養特集・道行(山田宗睦ほか) 日本語むかしむかし・組文弥生のことばをさぐる(卑弥呼の読み方、宝町入狂言・柿山伏・千五郎V・鎌倉入平曲V・平安八源氏物語V・奈良八万葉集金田一春彦・大野晋ほか)をみ、隅田川(六郎) 百万(宝生弥一) 鞍馬天狗(豊嶋弥左エ門)をきく。本は国立能楽堂の意義(増田正造、朝日二・二五) 地謡座を低く・国立能楽堂への要望のつづ(北岸佑吉、能楽タイムズ三月) 中世文化の心と形・雑談(さぞうだんV(禅鳳雑談、村井康彦ほか、淡交一月) 日本語と朝鮮語(假面・笛・ハヤシ・

- 鈴・歌と踊り・わざおきほか、金思燁東京学芸欄、二(三月) 唐船の幻(馬場あき子、学燈二月、丸善) 太陽(能特集、三月、平凡社) 私と絵(三宅藤九郎、芸術新潮趣味欄、四九・十一・二七号) など。
- 四月の予告
- 四月四日 藤田道善能午前一時始  
能 驚 大槻 秀夫 西村 欽也  
井上松次郎
- 能 石 橋 梅若 盛談 高安 滋郎  
観世 武雄
- 能 武 悪 井上松次郎 井上礼之助  
佐藤 秀雄
- 四月十一日 観世会十二時半始  
能 雲 林院 梅若万三郎 西村 欽也  
佐藤 秀雄
- 能 蟬 丸 山本 勝一 高安 滋郎  
大槻 秀夫 井上松次郎
- 能 寝 音山 野村又三郎 井上礼之助
- 四月十八日 中部金剛会正午始  
能 三 輪 鈴木 タミ 西村 欽也  
佐藤 秀雄
- 能 俊 寛 豊島三千春 高安 滋郎  
井上松次郎
- 能 鞍馬天狗 東田 康文 高安 勝久  
日比野圭昭
- 能 歌 争 井上礼之助 大野弘之  
井上松次郎 佐藤 友彦
- 四月廿四日 大蔵狂言会
- 四月廿五日 久田観世会
- 能 羽 衣 松井ちるの 高安 滋郎
- 四月廿九日 幸友会

城

割烹・小料理



熱田能楽殿内喫茶部  
・住吉小路(中区栄3-10)  
電話 244-0248



# 狂言

昭和51年4月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区橋一丁目7-5  
 井上重兵衛方 電話(321)1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 日東印刷工業株式会社 電話(481)7445

## 狂言人語

大藏流長老、茂山千作氏が此度人間国宝の指定を受けられた。狂言界にとって真に喜ばしいことであり、心からお祝いを申し上げたい。故善竹弥五郎現野村万蔵氏に次いで狂言界からは三人目の指定である。和泉流長老万蔵氏と、大藏流長老千作氏、元気なお二人の人間国宝を擁して、いよ／＼末広がり狂言界の発展が期待されるものがある。

## 四月の催能

四月四日 藤田追善能午前一時始  
 能鷹 大槻 秀夫 西村 欽也  
 井上松次郎  
 能石 橋 梅若 盛義 高安 滋郎  
 觀世 武雄  
 能武 惠 井上松次郎 井上礼之助  
 佐藤 秀雄  
 四月十一日 観世会十二時半始  
 能雲 林院 梅若万三郎 西村 欽也  
 能蟬 丸 山本 勝一 高安 滋郎  
 大槻 秀夫 井上松次郎

## 狂言音曲

四月十八日 中部金剛会正午始  
 能三 輪 鈴木 タミ 西村 欽也  
 佐藤 秀雄  
 能俊 寛 豊島三千春 高安 滋郎  
 井上松次郎  
 能鞍馬天狗 東田 康文 高安 勝久  
 日比野圭昭  
 能歌 争 井上礼之助 佐藤 友彦  
 大藏狂言会  
 四月廿五日 久田観正会  
 能羽 衣 松井ちるの 高安 滋郎  
 四月廿九日 幸友会

## 狂言解説

武悪||不奉公者の武悪を討って来いと命令された太郎冠者。背に腹は代えられず討手に向いますが、どうしても振上げた太刀を振り降ろすことが出来ず、武悪を逃がしてやります。  
 寝音曲||太郎冠者が自宅で謡をうたうのを聞きつけた主人。早速呼び出して語わせようとします。横着者の冠者は酒を呑まねば声が出ぬの、女のひざ枕でなければ謡われぬのと、色々注文をつけますが……。

## 狂言紅白

野村 広二

歌争||連れ立って野遊びに出かけようという二人。しゃやくを見てはおかしな古歌を引き、野に出れば、つくしを見つけて珍妙な歌を詠むといった有様。結局は歌の争いから取組み合いへとエスカレートして行きます……。

能・狂言の受賞は、昨年末の五十年度芸術祭優秀賞決定につづき、今年に入って、芸術選奨新人賞が山本順之のぶゆき、観世流、大阪)にきまる。芸術院賞はない。そして茂山千作氏が人間国宝になれる。多筆を要せず、まことにめでたい。また、重要無形民俗文化財の指定には、改めて岐阜県能郷(のうこう)の能・狂言や黒川能はじめ、愛知県の花祭、西浦(にしうれ)の田楽、壬生狂言、四天王寺聖霊会の舞楽などが挙げられる(狂言一七四号関連)。  
 三月二八日は中日五流能。端麗な花籠・籠之伝と大返(元正)円味ある海人・懐中之舞(信高)重厚な通小町・杖之型(英雄)けんらんたる住吉詣・悦之舞(博太郎・元昭)優雅鮮烈の殺生石・玉藻前(巖)五番をみる。  
 それぞれに佳。この殺生石は初見だが、切りの長袴で長い橋掛を進む走り込みが強い印象を与えてくれた。  
 四月、四日の藤田追善能で催主藤田六郎兵衛(ろくろびょう)氏は一管独吟江口(謡・喜之)を手向ける。流祖清

兵衛三百五十年忌と先代清兵衛五十年忌である。本幕で長袴の二人が登場。全体十六分ほど。「おもしろや」のあと(序之舞)独演。「江口」の心を吹く。能管の芸を固く伝えてきた家元芸の格調の高さは深秘かつ心魂に迫る。無心の至芸。これに対する喜之氏も心で謡って喜之の本領をきかせる。まことに日本の笛と謡が美しい世界を現前させた微妙の舞台であった。嗣子昭彦氏は石橋・師資十二段之式の笛。舞のおわりの方で二つ並べた台上の紅白の牡丹の花の間に目付柱からツレ・白・赤ツレと立ち並びカシラを振る雄々しい姿にかぶせるような笛の演奏(独演)が特に印象的。高弟の寛三男氏が鷲(大槻秀夫)の笛を抜く。十一日の観世会は手固いなかにも優美さこもる雲林院(万三郎)と美しく悲しい物語をやわらかくきれいに描く蟬丸・替之型(山本勝一・秀夫)に盛会。狂言は、武悪(松・礼・秀、藤田追善能)寝音曲(又・礼、観世会)おもしろし。地藏舞(東次郎・則直、中日五流能)は秀逸さて、三月名古屋観世流の長老柴田初太郎氏の米寿祝賀会が盛大ににおこなわれて同氏のいよいよ健在を祝したのが、同月明暗を興にして同流高野瀬透氏他界。八十一才。ご夫妻連れ立って徳川美術館を訪ねられる姿がほほえましかった。  
 放送は思い出の名人集(先代万三郎兼資・弓川と宝生新・六平太。解説増田正造・ゲスト野村万蔵。一噌又六郎 鉄二・高安道喜諸氏の演奏姿にも接する。

好評、NHK、以下おなじ)をみる。ほかに義経伝説の芸能(国立劇場公演 ニュースセンター9時)神社能(新潟県朝日村大須戸、奉納をすませて農耕に入る、CBC、オモテの上にかズラ帯)も。本は大蔵だより(四六号、現家元襲名披露番組。古本能狂言刊行ほか、寄贈)乱世(続、衆人愛敬ほか、中世文化の心と形(4)、村井康彦ほか、淡交四月号)鉢木(茶の随想、匂いと色と(4)、秦恒平、同誌)桜時代(秦恒平、第六回さし絵・西行桜・出岡実、東京一月上旬)など。

### ひょうたん

管原孝標女の著した「更級日記」に有名な「竹芝伝説」と呼ばれる物語がある。作者が父に連れられ東の国から上京する途中、武蔵国竹芝寺に立ちよった際、こゝに伝わる伝説を日記に書きとめたものである。昔、この国に住む男が宮中火たきやの衛士にかり出され、宮中のお庭を掃きながら、次の様な独言を云った。「などや苦しきめを見るらむ、わが国に七つ三つつくりすへたる酒壺に、さし渡したるひたえのひさごの、南風ふけば北になびき、北風ふけば南になびき、西ふけば東になびき、東ふけば西になびきを見て、かくてあるよ」この男の独言を帝の娘が聞きつけ、大いに興味を抱き、やがて卑しい男の背に負われて東下りの次第となる。帝の娘が興味を持ったのは「いかなるひさごの、いかなるひさごなら

む」であった。

このひさご、ひょうたんの特異な形と、水に浮く様、風に吹かれる様、或いは叩いての音と、いずれも「浮いたかひょうたん」の言葉で云い表わされる様に心の浮き立つ様に用いられる。

「あまりの徒然に、  
垣にひょうたん吊いて、  
折節風が吹いて来て、  
彼方へはちやつきりひよ、  
此方へはちやつきりひよ、  
ひよひよらひよひよ、  
ひょうたん吊いて面白やの。」

(狂言小謡より)

「忍ぶ軒端にひょうたんは植えてなをいてな、はくせてならすな、心のつれて、ひよひよら、ひよひよめくに。」

(閑吟集より)

「世の光ぞと頼む、  
茶のきょうの仏の、キョヒョン、  
御寺たつふね、キョヒョン、  
会津の里は陸奥にあり、  
ひょうたんふくべに緒を付けて、  
折々風の吹く時は、  
ヒョラヒョラヒョン。」

(天蔵「福部の神・勤入」)

「あまり淋しきに、垣に瓢箪つくらせた。をりしも風が吹いて、あなたの方へからころひよ。こなたの方へからころひよ。からころ／＼瓢箪の吊らせたは、いよこのまこと、何より以て面白い。云々  
(瓢箪節「紙鳶」所収)

(鈍太郎)

### 五月の予告

五月三日	流友大会	五月五日	巽会	五月九日	龍吟会	五月十五日	観世九草会	五月十六日	鳳鳴会	五月二十二日	猶飄会	五月二十三日	観衛会	五月三十日	やるまい会
能三	能井	能樋ノ	能翁	能翁	能翁	能翁	能翁	能翁	能翁	能翁	能翁	能翁	能翁	能翁	能翁
輪	筒	酒	(巻)風岡	勇二	小袖曾我	占	松	占	松	風	葛	葛	葛	葛	葛
足立	戸田	佐藤	勇二	高橋	山本	山本	井上礼之助	山本	井上礼之助	杉田	伊藤	伊藤	伊藤	伊藤	伊藤
知子	和	友彦	井上松次郎	小島	照美	照美	佐藤	照美	高安	合子	西村	西村	西村	西村	西村
西村	高安	井上礼之助	井上松次郎	秀雄	高安	高安	友彦	高安	高安	友彦	友彦	友彦	友彦	友彦	友彦
欽也	滋郎	井上礼之助	井上松次郎	友彦	友彦	友彦	友彦	友彦	友彦	友彦	友彦	友彦	友彦	友彦	友彦

(秋中交叉点角 軍艦旗を目当にお出下さい)

# 楽 清 烹 割

TEL 763-2211  
昭和区隼人町1-1

二階 食堂  
三階 お座敷50人位迄 宴会お引受致します  
仕出し、宴会、出前、迅速応相談  
能楽関係者特に勉強します





狂言人語

ゴールデンウィークを抱えた五月。演能も最も盛んな月です。

五月三十日は「やるまい会」、野村又三郎師の主宰する狂言会で、第十七回公演が盛大に催されます。野村万之丞、万作両氏に、大藏流からは茂山千之丞、正義氏らが来演。特に今回の話題は、又三郎氏の息、信行（四才）君が「靱猿」の子猿の役で初舞台を勤めることでしょう。狂言師は俗に「猿に始つて狐に終る」と云いますが、名門又三郎家の芸を継ぐ信行君の狂言師としての出発です。大いに期待されるものでしょう。

「朝日狂言会」の公演を決定しましたのでご案内申し上げます。別掲（裏面）番組予告の如く、大藏、和泉両流の競演で、狂言五番を揃えた豪華な内容です。大藏流からは善竹忠一郎師を迎え大藏流だけにある珍しい「左近三郎」とポピュラーな「棒縛」。和泉流「内沙汰」は大藏流「右近左近」と同じ狂言ですが演出にもかなり異なったものがあり、和泉流で演ぜられるのは当地では久方振りのことです。和泉宗家保之師は、賑やかな「仁王」。共同社

の若手連が総出演でお贈りします。どうかご期待下さい。

五月の催能

五月三日	流友大会	五月五日	巽会
五月九日	龍吟会	五月十五日	観世九皇会
五月十六日	鳳鳴会	五月二十三日	観衛会
五月二十二日	猶颯会	五月三十日	やるまい会
能小袖曾我	高橋 謙一	能玉 葛	伊藤 一枝
能海 士	有賀 滋子	能靱 猿	野村万之丞
能安 遠原	山崎 照美	能脱 敷	野村又三郎
能舟 ふな	井上松次郎	狂茶子 味梅	野村 万作
能松 風	杉田 合子	能鼻 船弁慶	豊嶋三千春
			野村又三郎

昭和51年5月1日発行  
発行所 名古屋市中区橋一丁目7-5  
井上重兵衛方 電(321)1430  
名古屋狂言共同社  
印刷所 日東印刷工業株式会社 電(481)7445

狂言解説

榎ノ酒ノ外出する主人にそれぞれ米蔵と酒蔵の留守居を云いつけられた太郎冠者と次郎冠者。互いに蔵を離れることはならずとも、呑みたい呑ませたいの一心で、酒蔵の窓から米蔵の窓に樋をさし渡し、これに酒を注いで呑むことを考えつきます。

三番叟能「翁」の際に、狂言方が勤めるのが三番叟である。千才、代つて翁の舞三番叟が登場、前半は直面で躍動的な様子の段、後半は黒式尉の面をつけ、面箱から鈴を受け取って壮重な鈴の段を舞い納める。狂言師にとっては何れも一つの習い物であり、修業過程ではその登壇門に当るものでもある。

ことを瘦松と呼びならわすもので、それが地名となったそうです。舟ふな主人のお供で西の宮へ遊山に出かけた太郎冠者。途中の神崎の渡しで渡し舟を呼ばんとて「ふなやーい」と大声で呼ばります。主人があれはふねじゃと云っても聞きません。主従の間に、またもや「ふねふな論争」が始まります……。

持祈禱が始まりますと、執心の深い奥は、あつちこつちのり移り……。山伏と衆との一騎討ちです。

狂言紅白

野村 広二

新緑の五月、中旬になると、庭の夏みかんの白い花が甘酸っぱい匂いを家の中まで送りこんで一層さわやかになる。この間まで梅・桃・桜の季節であったのが、卯の花・さつき・あやめ・ばらの咲く頃と今年も変る。四月に続いて東西の演能は五月もはなやかな話題が多い。

五月一日は熱田神宮舞楽神事。晴。蘇利古(そりこ、四人舞)は雑面(ぞうぞん、藏面とも)で舞う。厚く固い長方形の白紙の面に黒色の山形や巴や三角で目鼻立ちをかたどる図案化された雑面の舞は話には聞かせるははじめて。黒い目のあたりには円く穴があいているのを見つけた。舞楽の本では気がつかなかったこと。興味があった随分と前に、京都美術館のミロのウイナス展(朝日)へでかけたときもそうであった。美しい女

第十八回

朝日狂言会

昭和五十一年七月十一日午後一時半始

熱田神宮能楽殿

早舞

藤田六郎兵衛 福井啓次郎 河村隆一郎 助川竜夫

松

佐藤友彦 大野弘之

井上礼之助

左近三郎

善竹忠一郎 善竹圭五郎

内沙汰

井上松次郎 佐藤秀雄

棒

善竹圭五郎 善竹忠重

仁

王和泉 和之

野村又三郎 佐藤友彦 歌村鴻助 石田喜樹 鷺見良治 今枝政行 井上祐一

会費 指定席五百円 普通席二百円 贈上席八〇〇円  
取扱所 朝日新聞名古屋本社企画部 電話八三三  
中区橋下丁七七一五 井上芳 電四八三  
各出演楽師宅各百貨店ブレイガイド六月上旬発売

神像に最前列まで近付いて、発する言葉もなくしげしげと見入ったとき、やや曲げた左ひざのところで下半身をおおう衣裳のひだが少しあいて、見事な脚が見えるようであった。その瞬間はあの香気ただよう姿を突に何回となく写真で見ながらはじめての出合いであった。九日、前月に続く藤田追善能(竜吟会)は「宝翁」(宝生流・風岡勇二)ではじまる。三番叟は井上松次郎、面箱は佐藤友彦の役。雙調音取(藤田六郎兵衛)盤渉カラス手

(昭彦)をきいてかえる。前曲は重厚深淵、固い結晶の美しさにききほれる。微妙で流れがちな笛の音を巧みに引き締め、気品ある笛の世界に誘いこんだひととき。後の曲はのびのびとはな

やかで佳。なお四月は、十九日充実した中部金剛会をみる。盛会。豊嶋弥左衛門氏の仕舞が花を添える。二十四日は第六回大蔵流なごや会。終始さわやかな会である。善竹圭五郎氏が祐善、大蔵弥太郎氏が福部の神を舞う「蓮の花笠」(祐善)「掃り給えば」(福部の神)のあたりすばらしさが胸にこたえた。大蔵氏から父上弥五郎翁の稽古のきびしさとこれをうける同氏の謙虚な心のつながりを承って、稽古の微妙な世界に頭が下った。来年も期待したい。

催しは、長唄東音会(第十七回、朝日)に狂言風の新曲道行大津絵(村上元三詞・杵屋弥三郎曲、長唄協会創立五十周年記念・六曲屏風のうち)ができる。また春の日展(中日)で黒川能(森田茂)薪能(井上宣通)などをみたこともあわせしるす。

放送は二人袴(野村万蔵・万作、解説山崎有一郎、NHK、以下おなじ)鷺(観世喜之、解説同氏)小鍛冶(桜間金太郎)巴(喜多長世)をみ、頼政(後藤得三)歴史と人間・世阿弥(観世寿夫、きき手三國一朗)をきく。本は、能とは何か(川瀬一馬、講談社文庫)民俗芸能と伝承・能那猿楽にみる(朝日学芸欄、四・二四夕刊)日本の橋(能の橋掛、白洲正子、芸術新潮五月)追悼武者小路実篤特集・扇額三つ(中川一政八武者さんの書は進んで能役者の動きのようなコクが加わった云々(新潮六月)など。

六月の予告

六月五日 熱田祭納能

能小 鍛治 加賀 敏彦 高安 滋郎

能杜 若 吉田 俊彦 高安 勝久

能鶴 銅 水谷 泰典 西村 欽也

能雷 井上礼之助 野村又三郎

六月六日 青陽会

能加 加茂 梅田 邦久 高安 滋郎

能道 小町 佐藤 太俊 高安 勝久

能山 姥 久田 秀雄 西村 欽也

能竹ノ子 大野 弘之 井上礼之助

六月十二日 謡会

能恋 重荷 加藤 富永 武 河村 鉦二

能小 督 観世喜之 岡治郎 右エ門

能獎 上 梅若 六郎 西村 欽也

能鐘の音 井上松次郎 井上礼之助

六月二十日 宝生会別会追善能

能安 宅 辰巳 孝 高安 滋郎

能半 蔀 井上礼之助 井上祐一

能海 人 大坪十喜雄 西村 欽也

能魚 説法 井上松次郎 佐藤 友彦



昭和51年6月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区橋一丁目7-5  
 井上重兵衛方 電(321) 1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 日東印刷工業株式会社 電(481) 7445

狂言人語

暑い夏、綿入れ胴着の上に何枚もの装束を着込んで演技する催能は、ひと頃前には夏は夏期休暇、替って袴能や野外での涼味たっぷりの新能が夏の風物誌として愛好者を楽しませてくれました。近年はいよ／＼演能は盛んとなり、加えて冷房設備も整った能楽殿で

暑中御見舞

は、盛夏の最中もかわらず盛んな催しが続きます。まずはその発展を示すものとして喜ぶべきことでしょう。

六月の催能

六月五日 熱田祭奉納能  
 能小 鍛治 加賀 敏彦 高安 滋郎  
 能杜 間 若 吉田 俊彦 高安 勝久  
 能鶴 間 水谷 泰典 西村 欽也  
 能雷 間 大野 弘之 野村又三郎  
 六月六日 青陽会  
 井上礼之助

狂言共同社 名古屋和泉会

六月十三日 観世会  
 能小 督 観世喜之 岡治郎右エ門  
 能葵 間 上 梅若 六郎 西村 欽也  
 能鐘の音 大野 弘之  
 六月二十日 宝生会別会追善能  
 能安 宅 辰巳 孝 高安 滋郎  
 能半 間 井上礼之助 井上 祐一  
 能海 間 大坪十喜雄 佐藤 秀雄  
 能魚 間 野村 蘭作 西村 欽也  
 狂魚 間 井上松次郎 佐藤 友彦

能加 茂 梅田 邦久 高安 滋郎  
 能通 小町 佐藤 友彦  
 能山 姥 久田 秀雄 西村 欽也  
 狂竹ノ子 大野 弘之 井上礼之助  
 六月二十二日 謡会  
 能恋 重荷 加藤 武 河村 鉦二  
 井上松次郎

狂言紅白

野村 広二

各地で新能・夜の野外能がおこなわれる季節となった。

五月三十日、狂言やるまい会。盛会で、嗣子信行君が靱猿の猿を勤める。初舞台。月みるところがとりわけ可愛らしかった。猿曳はもろん父の又三郎氏。やわらかくやさしい味の靱猿(大名万之丞・太郎冠者万作)で、信行君の成長に期待をかけた。この初番と三番目(茶子味梅)が和泉流、二番目(脱殻・千之丞)四番目(泉・正義が大蔵流、交互におこなわれる。久方振り上演の茶子味梅(ちやすあんばい万作・松次郎・礼之助)のしみじみとしてしかも湿りもほどほど、小舞あり楽の舞あり、明るく終るかと思えて終りの変り目の憂うつきもおもしろく演ぜられ、ふくらみとしておとなしい出来ばえが佳かった。脱殻は鬼のオモテ(武悪)をつけられた千之丞氏が清水に自分の顔をうつして驚く前後がとりわけ秀逸。泉は明るくあざやかに威容を整えながら、実際には祈る力のない山伏を正義氏が好演。そして切りは舞囃子船弁慶・白波之伝(金剛流豊嶋三千春子方豊嶋幸洋・ワキ西村欽也ほか)。

した、その日その日が無事過ぎれば大慶ですと、すっかり健康を取り戻され楽しそうであった。一管独吟・江口(藤田追善能)の話もした。六郎氏とは来る十八日の「思い出の芸人」(先代万三郎と実、NHK、以下おなじ)の放送(ラジオ)で山崎有一郎氏と伯父万三郎・父実ご兄弟のことを語られた話を承った。笑顔のなかに遠く近い思い出のなつかしさが感じとれた。明るい楽屋であった。

催しは夏の院展で班女(橋上右袖脱ぎ夕顔の描かれた扇を胸に抱える。森田鉦平、松坂屋)をみる。

放送は熊野(元正、この日は一時間半)をみ「縄文の石笛」(広瀬量平・樋口清之ほか、能管との比較・相似および宗教と芸能のつながり、科学千一夜)をきく。なお昨年末から近頃までの「クイズ・グランプリ」(東海テレビ)能楽関係の話題はシテとワキ・シテとアド・観阿弥・世阿弥・見所・羽衣・鉢木・船弁慶・安宅と長唄勸進帳など。本は狂言の装束・素襦と肩衣(取材協力、千作・千五郎家・忠三郎家万蔵家・狂言共同社・新城狂言同好会豊橋魚八うお)町能楽会ほか、付研究論文、切畑健、京都紫紅社、七月上旬予定)日本人の心情・私の文化論(第十二回能の芸術観、川瀬一馬、東京五月下旬)交遊五十年・モンテ・ニユと私(関根秀雄、同氏の卒論吉田東伍・世阿十六部集とボワローの詩学、東京五・十七)日本の古絵本特集(海士・道成寺ほか関連、芸術新潮六月)九段下より(佐藤芳彦、田邊惣太郎師の米寿ほか、非売品、佳書寄贈)ほか。

お詫び。五月号で雑面(ぞうめん)が(ぞうぞん)になっておりました。お詫びして訂正します。

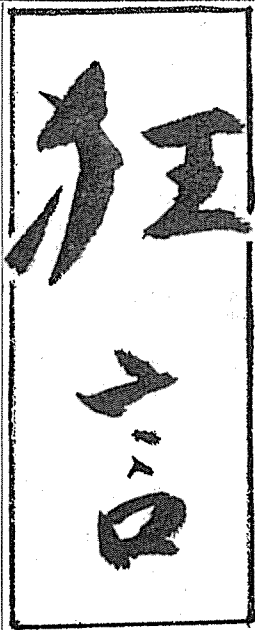
七・八・九月の予告

七月三日 盛門会 能巴 熊沢惠美子 高安 滋郎 能小 菊地 重郷 高安 滋郎 能小 治 重郷 高安 滋郎	七月十一日 朝日狂言会 狂不見不聞 佐藤 友彦 井上松次郎 狂松 佐藤 友彦 井上松次郎 狂左近三郎 佐藤 友彦 井上松次郎 狂内沙汰 井上松次郎 佐藤 友彦 狂棒 善竹圭五郎 佐藤 友彦	七月十四日 麦の会 能田 村 久田 徹二 西村 欽也 能東 北 衣斐 正宜 高安 滋郎 能鞍馬天狗 長田 高安 滋郎 狂引 井上礼之助 大野 弘之 七月廿四日 九 能千 觀世 武雄 西村 欽也 能花 高木美智子 高安 滋郎 能月 高木美智子 高安 滋郎	八月七日 薪守 狂薩摩 野村又三郎 井上松次郎 能小 能 内藤 泰二 高安 滋郎 能羽 長田 西村 欽也 能乱 武田 邦久 高安 勝久 能武田 邦久 高安 勝久	八月十五日 邦謡会 袴能 狂夜討曾我 梅田 邦久 大野 弘之 八月廿二日 和泉狂言会 芥 川 原田 三男 大原紋三郎	九月五日 大衆能 能通 小 世会 能山 姥 武田太加志 高安 滋郎 狂栗 焼 茂山千五郎 茂山 正義 九月十五日 雲雀山 齊藤 節子 佐藤 友彦 能杜 若 坪井香容子 内藤 泰二 大野 弘之 能鞍馬天狗 井上松次郎 大野 弘之 狂お 冷し 長谷川 章 高安 滋郎 九月十八日 九 能通 小 吉田 妙 西村 欽也 能菊 慈童 井上松次郎 大野 弘之 狂蚊 相撲 井上松次郎 大野 弘之 九月廿三日 宝生会 能千 手 本間 英孝 倉本 雅 能綾 鼓 大坪十喜雄 井上松次郎 狂寝 音曲 佐藤 友彦 大野 弘之 九月廿三日 於阿崎隨念寺 能鶴 近藤 幸江 佐藤 秀雄	九月廿六日 淡交会 能俊 寛 橋岡 久共 井上松次郎 能遊 行柳 伊藤 長八 佐藤 秀雄 狂盆 山 井上礼之助 大野 弘之
---------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------

第十七回 大衆能

能 紅葉狩 能 附祝言 能 後見 吉田 正宜 地謡 竹腰 勝一 鬼頭 嘉二	能 仁王 能 足立 知子 戸田 澄和 玉井 博祐	能 融天鼓 能 長田 駒 前田 茂穂 福井 良一 助川 重一	能 通小町 能 後見 今村 嘉男 地謡 高橋 和男 武田 弘一 加藤 兵衛	能 野島 能 丸段虫葛宮段 能 日比野圭昭 山田 亮 塚本 秀雄 水藤 元三 加藤 兵衛 生駒 美代子 服部 紗枝	能 八島 能 後見 梅田 邦久 地謡 加賀 敏彦 須部 武甫 長谷川 章 塚本 秀雄 鬼頭 季信	能 鶴龜 能 高安 勝久 飯富 雅介 佐藤 秀雄 吉田 定男 福井 啓次郎 藤田 昭彦	能 大衆能 能 昭和三十二年九月五日(日)午後一時始 於名古屋榮 愛知文化講堂
---------------------------------------------	-----------------------------	-----------------------------------	------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------	------------------------------------------------	--------------------------------------------

||終了予定五時||



狂言人語

涼しい、異常だ、などと騒がれた今年夏の始まりでしたが、その後の暑さはまた格別、これからの残暑がいよいよ身にこたえそうです。

先に当地名演会館で上演された劇団印象公演、ふじたあさや作・演出、現代の狂言「八十八」「面」を観る機会を得ました。狂言の演出、技法をそのまゝとり入れ、新劇の世界に持ち込んだものと云うべきでしょう。本来狂言の演技は出発時点ではかなりリアルな芝居に近いものであったはずですが、その後長い歴史の中で無駄な動きを切り捨て、今日の磨き抜かれた舞台を創造しました。それは今日動かぬことが演技の基本であるかのごとくです。従って動く場合にはそれが大きく、より強く観客に訴えることが出来ること云々ましよう。新劇では、舞台上に立っている時はすべて演技してなければなりません。細かい動き、心理、すべての動作が必然性として捉えられ、納得された上で演技がされるものでしょう。こうした立場の新劇人が、狂言様式で舞台を創るといふのは大変辛く、苦しいことなのかもしれません。動かない、

昭和51年9月1日発行  
発行所  
名古屋市中区橋一丁目7-5  
井上松次郎 電話(321)1430  
名古屋狂言共同社  
印刷所  
日東印刷工業株式会社 電話(481)7445

じっとしているということは、舞台上では特に辛いことです。演者にとつてたまたま不安に違いありません。今回の現代の狂言はこうした困難な課題によく挑戦し、意欲的な舞台をよく創り上げていたと云えましよう。若い俳優たちが、よく狂言の型、動き、発声法によく稽古のあとをうかがわせてくれました。たゞやはり動かぬ時の姿勢、ほんの少しの動きで効果を表わすという最も狂言の真髓とも云うべき点にはまだ工夫の余地があり、全体に演者の視線、眼で演技してしまうのが、大変気になりました。今後の課題と云うべきでしょう。

さて、九月、いよいよ秋です。大衆能をかわきりに、各流の例会、別会発表会が目白押しに予定されています。狂言会も、十月の「やるまい会」、十一月には「狂言和泉会」特に今秋の和泉会は故佐藤卯三郎師追善として和泉流の人間国宝野村万蔵師、および三宅藤九郎師の来演が予定され、盛大な催しとなるはずで、どうか御期待下さい。

九月五日 大衆能 (文化講堂)

能 鶴 亀	河村 証二	高安 勝久
能 通 小 町	佐藤 秀雄	
能 紅 葉 狩	玉井 博祐	高安 滋郎
	松井直子	大野弘之
狂 仁 王	井上松次郎	佐藤 友彦
	石田 歌村	今枝 良治
九月十二日 観 世 会	武田太加志	高安 滋郎
能 通 小 町	片山博太郎	西村 敏也
能 山 姥	茂山 正義	
狂 栗 焼	茂山千五郎	茂山 正義
九月十五日 観 雲 会	齊藤 節子	高安 滋郎
能 雲 雀 山	佐藤 友彦	
能 杜 若	坪井香容子	西村 敏也
能 鞍馬 天 狗	内藤 泰二	高安 滋郎
能 駒 童	井上松次郎	大野 弘之
狂 小 冷 し	佐藤 秀雄	井上礼之助
九月十八日 九 単 会	長谷川 章	高安 滋郎
能 通 小 町	吉田 妙	西村 敏也
能 菊 童	井上松次郎	大野 弘之
狂 蚊 相 撲	生 会	
九月廿三日 宝 生 会	本間 英孝	高安 滋郎
能 千 手	倉本 雅	西村 敏也
能 綾 鼓	大坪十喜雄	西村 敏也
狂 寝 音 曲	井上松次郎	大野 弘之
九月廿三日 於岡崎隨念寺	佐藤 友彦	
能 鶴 龜	近藤 幸江	高安 滋郎
	佐藤 秀雄	
九月廿六日 淡 交 会	橋岡 久共	高安 滋郎
能 後 寛	井上松次郎	高安 滋郎
能 遊 行 柳	伊藤 長八	高安 滋郎
狂 盆 山	井上礼之助	大野 弘之

狂言解説

仁王 突打ですっかり打ち込んだ男他国へ逃げようとする所を知人の入れ知恵で仁王に化けて供物を盗ることにまりました。上野へ仁王が降ったという触れ込みで、知人が参詣人を集めま

栗焼 丹波の伯父から贈られた栗を焼く様に云い付けられた冠者。栗を焼く内にあまり美味そうなので、つい一口をつけたが最後、とうとうみな食べてしまいます。さて此云い訳には：お冷し 清水に遊山に出かけた主従滝の水を汲むと主人の口から出たのが「お冷しをむすぶ」ということば。太郎冠者でなくともからかいたくなるもの。例によってこの主従の間に「お冷し」論争が始まります。

蚊相撲 新参者を抱えんとした大名太郎冠者が連れて来たのは江州守山から出た蚊の精です。早速得意だという相撲の相手に大名がなりますが、チクリとさされて気を失う始末。蚊に負けるは口惜しいと秘策を練って再度勝負を挑みます……。

寝音曲 太郎冠者が謡を謡うのを聞きつけた主人。早速呼出して謡わせようとしてますが、度々謡わされてはかなわぬと、太郎冠者は酒を呑まねば声が出ぬ、女の膝枕でなければ謡われぬと注文をつけ、結局酒を呑んで主人の膝を枕に謡うことになりました……。

盆山 知人の盆山を盗みに入った男家人に見つけられあわてて植込みの蔭にかくれました。家人も知人であると知って、からかっておい返します。

狂言紅白

野村 広二

七月中旬蝉が鳴き出す。八月十五日お盆の送り火を焚いて、夜が静かに更けると、虫のひと声をきく。

七月の朝日狂言会・八月の薪能は年々恒例の催し。薪能は蝉時雨のなかに同好の方々が多数集ってはじまる。盛会。七月の朝日狂言会(第十八回)は大蔵二番・和泉三番。大蔵流は重厚円熟の小品・左近三郎(忠一郎・僧圭五郎)とふくらとして明るく軽妙な味わいが見事な棒縛(圭五郎・忠一郎・主忠重)和泉流は松次郎(百姓)・秀雄(妻)の内沙汰と友彦・弘之・礼之助の松樫が地元で好演。内沙汰は最後舞台に残った松次郎がかつとなつて吐き出すことばに我ながらばう然となつて立ちつくすふんい気がこのむつかしい曲を巧みに締めくくっていた。後者の両青年もうまく気を合わせすがすがし。今一番は切りの仁王(保之・又三郎・祐一ほか)。名古屋の立業はよく揃う。祐一は量感と軽さを増す。保之の「仁王」が大きな笑いをまき起す今回はおたやかで地味な味わいと格調に終始する舞台であった。

さて七月二十三日北岸祐吉氏が逝去されました。昨年春京都の金剛会でおあいしてからこちらへお目にかかっていない。今年の中日五流能の当日(三月末)も在京の由で、あの白髪ゆたかな温顔に接することはできなかった。日本の芸能全分野にわたる展望の広さ

と洞察の深さ、内外の見聞・知識の厚さと実践の大きが、実に数知れぬけんらん豪華・幽玄多彩の花を咲かせました古風そのものと古風な新しさが交差するなかで東奔西走され、書かれる大小の文章には「現代の目」がいつも光り輝いていました。そして北岸さんの重みは大きかった。お目にかかること、やわらかい言葉つきでの応答がまことに印象的。毎度あたたかい目で狂言のことに及ばれました。狂言共同社のことにも。朝日五流能のこと、奈良のお水取り。薪能・おん祭り。おん祭りのとき春日の宮司水谷川忠厩氏(故人)と三人が深夜の幕舎のうちで語り合ったこと西本願寺の出会い、四十九年の中日五流能で、胃を手術された後とて食べ物をお聞きしてから、短かい時間、一杯のコーヒーに話し合った名古屋のことなど思い出はつきません。金剛能楽堂でもよく一緒になりました。たばこは富士がお好きだった。昨年の能楽の友(八月、熱田能楽殿創立二十周年記念号)に寄せられた「名古屋の實力」をなつかしく読み返す。昭和のはじめ学校を出てすぐ朝日新聞社に入られ初赴任地が名古屋、呉服町・布池能楽堂のことなど同氏らしい懐古の情にあふれています。沼艸雨氏と隔月執筆の観世・今月の能から・関西(六月号)が私の目に觸れた最後の文章のようです亭年七十二才。ご冥福をお祈りします

放送は芸能百選・義経伝説の芸能(那須語・大蔵弥太郎ほか、NHK、以下おなじ)をみ、思い出の芸と人・先

代万三郎と実(話梅若六郎・きき手山崎有一郎、佳篇)夕べのひととき・狂言と小謡(松次郎・又三郎ほか狂言共同社、FM)をきく。あとは次号。

十月の予告

- 十月三日 九阜会
  - 相乱 野垣 慶子 西村 欽也
  - 狂 牛 井上松次郎 井上礼之助
  - 狂 蝸 佐藤 秀雄
- 十月十日 修 撰 会
- 十月十六日 やるまい会
  - 三筑 紫 奥 野村 万作 野村万之丞
  - 狂 鬼ヶ宿 茂山千五郎 茂山 正義
  - 狂 野 老 野村又三郎 井上松次郎
  - 狂 三人片輪 野村万之丞 井上礼之助
  - 小 舞 野村 信行 野村万之介
  - 十月十七日 猶 恵 会
  - 十月廿四日 青 陽 会
    - 舞 声 刈 久田 徹二 西村 欽也
    - 三 井 寺 吉井 順一 高安 滋郎
    - 間 井上松次郎 佐藤 友彦
    - 能 殺 生 石 高橋 瞭一 高安 勝久
    - 狂 伯母ヶ酒 大野 弘之 井上松次郎
    - 十月 卅日 宝 英 会
    - 十月卅一日 竹 韻 会
      - 半能半 薔 杉村 馨子 西村 欽也
      - 能 土 蜘蛛 稲垣 道雄
      - 狂 困 幡 堂 野村又三郎 井上松次郎

時楽子司 時楽茶舗
   
 中区丸の内一丁目五ノ二三
   
 (23) 五七六九





昭和51年10月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区橋一丁目7-5  
 井上松次郎 電話(321)-1430  
 名古屋狂言共闘社  
 印刷所  
 日東印刷工業株式会社 電話(481)7445

狂言人語

十月の催能

秋たけなわ、各地で祭行事が盛んです。当地も十月十六、十七日を中心とする名古屋まつり、協賛の催しも盛りたくさんです。特に十九日から三十一日まで県美術館における「桃山文化展」が開催、「遊芸の世」の部では能面能装束等も展示される予定です。国宝重文など百十点を集めた華麗な催しです。(朝日新聞社主催)

九月六日、徳川義親氏が逝去されました。名古屋和泉会の発起人、会長として、第一回和泉会狂言会に講演をされ、その後も色々と御尽力をいただきました。慎んで御冥福を祈ります。氏を中心として発足した名古屋和泉会も今年にはや十六回、別掲の如く十一月二十一日盛大に催されます。特に今回は故佐藤卯三郎師追善として、宗家保之師をはじめ、野村万蔵、三宅藤九郎の両師をお迎えします。人間国宝万蔵師の「名取川」藤九郎師の新作「じゃじゃ馬馴し」を中心とし、礼之助孫功元の子猿で井上家一門による「靱猿」、共同社若手総出演で賑やかな「首引」、どうかご期待下さい。

十月三日 九阜会	野垣 慶子	西村 欽也
狂乱	井上松次郎	井上礼之助
十月十日 修 瓢会	佐藤 秀雄	
十月十六日 やるまい会	野村 万作	野村万之丞
三筑 紫 奥	野村 万作	野村万之丞
狂鬼 ケ 宿	茂山 千五郎	茂山 正養
狂野	野村 又三郎	井上松次郎
狂野	野村 又三郎	井上礼之助
狂野	野村 又三郎	井上礼之助
三人片輪	野村 万之丞	野村 万作
小 舞	野村 信行	
十月十七日 猶 惠会		
十月廿四日 青 陽会		
能 芦	久田 徹二	西村 欽也
能 三 井 寺	吉井 順一	高安 滋郎
能 殺 生 石	井上松次郎	佐藤 友彦
能 伯 母 ケ 酒	大野 弘之	井上松次郎
十月 卅日 宝 英会		
能 羽 衣	藤田 静代	西村 欽也
能 望 月	本間 英孝	高安 澄郎
狂 竹 生 鳥 参 り	野村 又三郎	井上礼之助
十月 卅一日 竹 韻会		
半能半 薨	杉村 蓉子	西村 欽也
能 土 蜘蛛	稲垣 道雄	高安 勝久
狂 困 幡 堂	井上礼之助	
	野村 又三郎	井上松次郎

狂言解説

蝸牛||百歳に余る祖父に長寿の薬としてかたつむりをとって来る様云い付けられた冠者。かたつむりを知らぬ冠者が教えられた通り、藪へ入って見ると、頭が黒く、腰に貝をつけた者が寝ています。冠者はおそろしく声をかけました……。

筑紫奥||御年貢として元日に唐物を納める筑紫の国の百姓と、柑類を納める丹波の國の百姓が上り合せ、無事に納めるといいうわゆる百姓狂言。めでたく二人の百姓とお奏者の三者で笑い留めとなります。

鬼ヶ宿||安達ヶ原の黒塚に住む女となれそめた太郎と云男、久方振りに女のもとを訪れます。女はすでに太郎をうとんじ、酒を買いに太郎をやらせた後で鬼の面をつけて待ちうけ……。

茂山千五郎家のみに伝わる曲で、井伊大老の作と伝えられております。

野老|| (ところ) || 奥丹波から都へ上る僧、ある山里で由ありげな卒塔婆を見つけ、在所の者に尋ねると、野老(山芋)の執心を申したものと、早速僧が誂経して申うと、野老の精があらわれます……。

三人片輪|| 片輪者を召抱えんと有徳者が高札を打つと、食いはぐれたばくち打が三人、座頭、いざり、おしと偽って次々に抱えられ、主人が留守になると、とたんに正体を現して酒宴を始めます……。

伯母ヶ酒|| 酒屋に伯母を持つ男、何とか酒の振舞に預ろうと様々に話をもちかけますが、どうしても伯母は首をたてにふりません。一計を案じた男は一たん戻って鬼の面をつけ、再び伯母の酒屋へ訪れます……。

因幡堂|| 大酒呑のわづしい女房に手をやいた男、女房が実家へ遊びに行つたあとから離縁状を送りつけ、因幡薬師に申し妻にこもりました。これを知つた女房は夢のお告げの様に云って、自らお告げのお妻に紛して男を待ち受けます……。

狂言紅白

野村 広二

九月十四、台風十七号と秋雨前線が去つたあとの晴れた日、秋の風が何かを伝えるように吹いていた。あれだけの大雨、そっくり大かんばんの英国へあげられるものなら送り届けたいと思つた。岐阜県安八町の図書館の水浸しになつた本の光景(各局テレビ)も身につまされた。

十日狂言共闘社が岐阜市民会館の狂言鑑賞会にでかける。華陽高校の生徒諸君に雷と武悪をみてもらう。熱心かつ笑いが大いに起る。創立四十五年記念の古典芸能の会。この日も大雨と台風東進の最中、早目に出発したが篠つく雨の中を三時間、七時開演時刻すれすれの到着でやっとなにに合、期待にこたえてよかつた。同行の私も時間の都合で能の話は短かく能と狂言の話に切り替えたが、学校側からうまくまとまつた狂言の説明文が配られて効果が







狂言人語

ロッキードに湧いた今年の政界も、いよ／＼大詰めを迎えました。戦後初めてという任期満了に伴う総選挙で、直接国民の審判を受けることになるようです。...

した機会に多くの学生、生徒の皆さんに鑑賞していただきたいものです。

十一月の催能

- 十一月三日 幸友会
十一月六日 梅若盛義後援会
能花 笹 梅若 盛義 高安 滋郎
能菊 慈童 梅若 盛義 西村 欽也
...

昭和51年11月1日発行
発行所
名古屋市中区橋一丁目7-5
井上松次郎 方 (321) 1480
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社 (481) 4745

索引

- 十一月廿三日 中部金剛会
能清 經 菊川 憲三 西村 欽也
能井 筒 金剛 巖 高安 滋郎
...

狂言解説

竹生嶋参り 主に無断で竹生嶋に抜け参りをした冠者。主の怒りに逢い、機嫌を直そうと、他人の話を秀句を折り込み面白おかしく話しますが、くちなわの秀句でつまってしまいます。...

狂言紅白

野村 広二

もう十一月の暦をくる。十月はやるまい会の狂言、十一月上旬は梅若盛義二番能(花童と菊慈童・遊舞之楽、舞囃子野宮・拜留・観世静夫)をみる。どちらも充実して見ごたえのある舞台であった。...

裏をいれて三方からみられる。舞台と見所は同じ高さ。百人は見物できようお寺は永祿年間家康公ゆかりの寺として建立、客殿は安永年間に建ち直り、舞台は昭和三十三年に手を入れられ現在に及んでいるが、橋掛は古い由。舞台はいつからあったかなど能の古い記録は残っていませんとお住持村田聖巖氏の残念そうなお説明だった。浄土宗の寺と能舞台。南に眺望の開けた静かな寺を辞するとき、そんな結び付きが頭をかすめた。

催しは桃山文化展(朝日、愛知県美術館にて)と東山御物入ごもつ展(徳川・根津両美術館・中日・日経主催)を楽しむ。言葉に尽せない多彩な「桃山」の方は能楽関係は能面(豊橋市安海入やすみまたはあんかい)熊野神社能装束(岐阜県関市春日神社ほか)屏風絵(豊国祭入徳川黎明会)と観能(大鼓・小鼓・光悦譜本に銘羅生門の古伊賀花生など。図録が美しい。後者は徳川美術館で。雑華宝印の新資料を中心に。こちらもすばらしい。懺法單法被(觀世宗家蔵)が展示されていた。戦後名古屋で目前に見ることができるのははじめて。副館長の大河内定夫氏は「足利將軍家の御物と呼ぶに最もふさわしい」「東山御物展の持つ意味を最もよく象徴している」と豪華な図録に寄せられた右單法被に関する一文で強調されている。同氏はまた「この品は八代將軍義政公から音阿弥が拝領とされているが、実は音阿弥が最も恩顧をうけた六代將軍義教公から賜った装束ではないか。というのは、義教公亡

き後、その追善供養に最も適当な曲として朝長を選ぶ。工夫して曲中の入らありがたの懺法やなVに因み、この拝領の品を懺法の入法被Vに用いたのでは。將軍家供養にはたびたび懺法の法会が行われた。かくて後になって觀世宗家は朝長懺法に限りこれを使うようになったと考えたい々(文責任野村)と他の理由も合せて大胆かつ見事な推論を展開されている。余りうまくない要約は許るさしたい。

放送は鶴・白頭(金剛巖、NHK、佳)をみる。本は「桃山」と「御物」ほか新年号で。

### 十二月の予告

- 十二月五日 義 捐能
- 能巴 間 吉川 周子 高安 滋郎
  - 能羽 間 高橋 瞭一 高安 勝久
  - 能卷 間 竹内 澄子 西村 欽也
  - 能耶 間 久田 徹二 高安 滋郎
  - 能二九十八 間 井上松次郎 大野 弘之
  - 能泉山伏 野村又三郎 井上礼之助
  - 能十二月十二日 風 韻会
  - 能羽 間 鬼頭貴代子 高安 勝久
  - 能百 間 佐藤アヤ子 西村 欽也
  - 能半餅養 間 佐藤 友彦
  - 能舟ふな 間 富士道周明 高安 滋郎
  - 能十二月十九日 青少年のための芸術劇場
  - 能の語 一部(十時始) 内藤 泰二

### 五十二年 一月の予告

- 一月七日 学生能
- 能竹生島 間 野村又三郎 野村又三郎 野村又三郎
  - 能花月 間 内藤 泰二 西村 欽也
  - 能羽 間 井上松次郎 井上松次郎
  - 能一月九日 青陽会
  - 能吉野天人 間 飯富 雅介
  - 能俊 間 殿島 修二 高安 滋郎
  - 能小銀治 間 近藤 幸江 高安 勝久
  - 能雁大名 間 井上礼之助 井上松次郎
  - 能一月十五日 清 韻会
  - 能帖 間 小島トミル 高安 滋郎
  - 能昆布壳 間 井上礼之助 佐藤 友彦
  - 能一月十六日 紳士能
  - 能枕慈童 間 鬼頭 京子 西村 欽也
  - 能羽 間 佐瀬 郁子 高安 滋郎
  - 能舟ふな 間 佐藤 友彦 大野 弘之
  - 能一月二十三日 武田取案会



何と云っても  
お茶は升半

◆大名古屋ビル地下街店◆栄(さかえ)地下街店◆サカエチカ力店◆松坂屋<名店街>売店